

海を越えて知った「当たり前」

ディーツアーであった。

私は1年次から3年間、毎年3月に実施される春のスタディーツアーに参加した。このプログラムは、人類が抱える諸問題や異文化にも関心を持ち、広く世界の中で自己の存在を位置づけ行動する意欲を育むことを目的としている。

私は、もともと海

外に興味が有り、幼い頃からJICA海外協力隊員に憧れを

抱いていたため3年連続で参加した。1年次にはタイとフィリピンを訪問した。フィリピンではストリートチルドレンに囲まれ、荷物を盗まれそうになる経験をした。日本では想像できない貧困の現実を目の当たりにし、これまでの自分の価値観を大きく揺さぶられる経験となった。

2年次にはベトナムとタイを訪問した。ベトナムでは急

速な経済発展の一方で、大気汚染など環境問題が深刻化しており、発展の裏側にある課題について考える機会となった。

3年次にはタイとカンボジアを訪問した。

カンボジアでは、厳しい貧困の中で暮らす子どもたちを目にし、大きな衝撃を受けた。また、毎年訪れていたタイの最大かつ最古のスラム街であるクロントイ地区では、高層ビルが

建ち並ぶ一方で、再開発による家賃の上昇で住み続けられなくなる住民がいる現実を知った。経済成長は生活を

豊かにする一方で、その恩恵を受けられない人々もいることを学んだ。

3年間のスタディーツアーを通して、私は人とのつながりの大切さを強く学んだ。言語や文化、生活環境が異なっている



ここから、相手の価値観や背景を理解し、互いに支え合うことの大切さを学んだ。また、物事を一つの視点だけで判断せず、多様な視点から考えることの重要性も実感した。

自分にとっての当たり前は、決して全ての人のための当

たり前ではない。スタディーツアーは私の価値観を大きく広げてくれた貴重な学びの場であった。今後このプログラムが多くの学生に新たな視点と成長の機会を与え続けることを願っている。

栄養学科4年

瓜生永愛

当たり前は当たり前ではない。そのことに気づかせてくれたのが、本学のスタ